

アニメ制作によるオペレッタの可能性

— 幼稚園教諭・保育士養成課程における試み —

宮坂 明¹⁾ 久原 広幸²⁾ 前田 りえ¹⁾

Possibilities of using operettas from animation productions: Examples from kindergarten teacher and nursery staff training courses.

Akira Miyasaka¹⁾ Hiroyuki Kubara²⁾ Rie Maeda¹⁾

(2021年12月1日受理)

はじめに

幼児期は、様々な経験を通して多様な可能性、創造性、諸能力を伸長する重要な時期である。オペレッタや音楽劇は複合的な要素を含んでおり、伸長に相応しい活動と言えよう。実際に、多くの幼稚園や保育園、認定こども園ではこのような活動が行われている。勿論、保護者や新入園児獲得のため、子どもたちの活動の様子を対外的にアピールするといった意味合いで行われている場合も往々にしてある。このような場合であっても、総合的な活動に変わりはなく、子どもたちの成長において有効であると思われる。これについては、第一章において述べたい。

幼稚園や保育園、認定こども園において、オペレッタや音楽劇を行うにあたっては、保育者の役割が重要である。台本をどうするのか、音楽をどうするのか、演技をどうするのか、大道具・小道具・背景をどうするのかなど、多岐に渡って考えを巡らす必要がある。当然のことながら、活動の主役は子どもたちであり、子どもの主体的な活動が求められる。子どもたちの主体性を引き出しながら活動を行うにあたっては、保育者自身がオペレッタ活動を経験しておくことが重要である。幼稚園教諭・保育士養成過程においては、このような経験ができる科目を設置したい。中村学園大学教育学部児童幼児教育学科及び中村学園大学短期大学部幼児保育学科では、以下のような科目を設置することで、幼稚園や保育園、認定こども園において、オペレッタや音楽劇活動を適切に行える保育者を養成している。

中村学園大学教育学部児童幼児教育学科

1 年次前学期：歌唱基礎（基礎科目）

1 年次後学期：音楽Ⅰ歌唱（基礎科目）

2 年次前学期：音楽Ⅱ歌唱（応用科目、オペレッタ含む）

3 年次前学期：声楽（応用科目）

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

1 年次前学期：基礎声楽（基礎科目）

1 年次後学期：音楽Ⅰ声楽（基礎科目）

2 年次前学期：音楽Ⅱ声楽（応用科目、オペレッタ含む）

※いずれも、令和3年度（2021年度）時点での設置科目
この中で、本論文に関係するのは、大学2年次前学期科目の「音楽Ⅱ歌唱」と短期大学部2年次前学期科目の「音楽Ⅱ声楽」であり、いずれもオペレッタ活動を取り入れて、学生自身が実際に企画・立案・準備・演技等することで、前述しているような実践力のある保育者を養成している。幼稚園教諭・保育士養成課程におけるオペレッタの重要性については、第二章において述べたい。

さて、ここまで幼稚園や保育園、認定こども園においてオペレッタや音楽劇活動を行うことは、子どもの成長にとって有効であること、幼稚園教諭・保育士養成課程においてオペレッタを実際に経験することは、活動が適切に行える保育者を養成するうえで必要であることを述べてきた。ところが、本論文執筆時点において、養成課程での実際の経験が思うように行えない事態が生じている。この事態は、2020年2月11日 WHO により「COVID-19」という疾患の正式名称が公表された新型コロナウイルス感染症の影響によるものである。この感染症をもたらす原因ウイルスの名称は、「重症急性呼吸器症候群コロナウイルス2（SARS-CoV-2）」である。この名称は、国際ウイルス分類委員会（ICTV）により疾患名と同日に公表された。このウイルスは、名称の通り呼吸器にダメージを与え、重篤化した場合、死に至ることもあり、世界で多くの方が亡くなっている。飛沫感染と接触感染により感染が拡大するため、我が国においては、緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置により拡大防止措置がとられている。ワクチン接種が進められ、

収束に向けた方策が講じられている。また、3密（密集・密接・密閉）を避ける、マスク着用、手洗い等も感染拡大を避けるため呼びかけられている。変異株の出現もあり、本論文執筆時点では、収束が見通せる状況にはない。このため、大学での授業はWEBが主となっている。特に、緊急事態宣言が発出されている場合、対面での授業は一切行えない。感染状況には波があり、感染者数が落ち着いた場合は、対面での授業も可能となる。

オペレッタは、歌い演じなければ成立しない。マスクを着用したとしても、至近距離で歌い演じた場合、すべての飛沫を遮断することはできない。もしも感染者がいたならば、クラスターを発生させる恐れもある。実演できない状況が生じたのである。このような状況ではあるが、幼稚園教諭・保育士養成課程において、何らかのかたちでオペレッタを経験させたいとの思いから、アニメを制作しオペレッタを行うことにした。行うにあたっては、実演のオペレッタにおいて、ゴミ削減の観点から、出来る限り大道具を置かず、背景をスライドで投写していたことが役に立った。背景に登場人物も入れ込み、動かすことで、演じなくても実演のオペレッタのような効果が期待できると考えたのである。第三章では、授業におけるここ二年間の取り組みを紹介し、アニメ制作によるオペレッタの可能性について論じた。

1. 幼児にとってオペレッタとは

幼児期における教育・保育とは、どのようなものであろうか。幼稚園で考えるならば、平成30年4月に施行された『幼稚園教育要領』第1 幼稚園教育の基本には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」とある。学校教育法第22条に目的、第23条の5つの項に具体的目標が示されているが、様々な経験や活動を通して、人格形成の基礎を培うのが、幼児期における教育・保育と言えよう。幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目がさらに詳述されている。この10項目は以下の通りであり、5領域を中心にさまざまな教育・保育活動が展開される際、相互的・総合的に育つものである。

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性・規範意識の芽生え

社会生活との関わり

思考力の芽生え

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

なお、この10項目については、次章でも述べる。また、これらは『保育所保育指針』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においても、ほぼ同様である。

では、幼児にとってオペレッタとはどのようなものであろうか。オペレッタとは、本来は小オペラと呼ばれるものであるが、幼稚園や保育園でオペレッタと称して行われているそれは、本来とは異なった捉え方をされているといえよう。インターネットで「幼稚園 オペレッタ」といったキーワードで検索すると、相当数のヒットがあるが、その内容は、音楽を伴った劇である。また、オペレッタという言葉を含んだお遊戯会向け書籍や楽譜も多数あり、これもまた前述と同じような内容である。幼稚園や保育園、認定こども園でのオペレッタは、音楽劇としても誤りではないと言えよう。オペレッタには、様々な要素が含まれており、この要素が相互的・総合的に絡み合って成立する。園にもよるが、年長クラスでは子どもと担任の話し合いにより台本を作成するといった活動も行われている。大道具や小道具を作り、衣装を考えるといったことは、子どもの健やかな成長にとって大いにプラスとなる。保育者がどのように取り組むかにもよるが、音楽能力・表現力の向上が期待できる。集団での活動は、他者への配慮が必要であり、協調性・協同性・道徳性・社会性などを育むことができる。当然のことながら、ここでも保育者の役割は重要である。保育者の働きかけにより、自主的な改善が行われ完成度が向上するようであれば、豊かな感性を培うことにも繋がる。このように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目を追求するのに相応しい活動が、オペレッタと言えるのではないだろうか。

2. 幼稚園教諭・保育士養成課程におけるオペレッタの重要性

今日の幼稚園や保育所では、年間行事の一環としてお遊戯会や音楽発表会が行われるが、それらの行事の中で、オペレッタなどの音楽劇を行う園が多いことは言うまでもない。そのため、幼稚園教諭や保育士を養成する大学等の養成課程（以下、総称して養成課程とする）においては、オペレッタを授業に取り入れているところが多くみられる¹。本学においても、オペレッタ活動の指導及び運営ができる力を育成することを目標とし、学生たちが単に演じて楽しむことが目標ではなく、実際の教育・保育現場で行われている活動を体験的に行う中で、前述

の力を養ってほしいと考えている。

オペレッタは、一般的に音楽科目で取り扱うことが多いように思えるが、音楽だけの科目に限らず、5領域「表現」の中の総合的な科目や、卒業研究、課外活動など、その活用範囲は広い。その理由として、オペレッタの取り組みが単に音楽劇の知識・技能の修得に留まることなく、コミュニケーション能力の向上や社会人としてのスキル向上、作品発表で得られる達成感など、様々な教育効果が考えられるからである。学生の達成感や表現力の獲得などを含め、オペレッタが一定の教育効果をもたらしていることは、これまでの研究で数多く報告されている²。

幼児の音楽劇のさきがけになったものは唱歌劇であるといわれ³、その後、玉川大学創始者の小原国芳によって学校劇という名称が全国に広められた⁴。小原は『学校教育』第69号で学校劇についての教育的重要性を述べている⁵。

養成課程におけるオペレッタの重要性については、山本（2009）がこれまでの先行研究・実践報告をまとめ、教育現場と養成課程におけるオペレッタの教育的意義について考察している。山本は、多くの実践報告や研究論文の存在から、オペレッタの教育的意義が大きいこと、総合して教育する意義が存在すること、それぞれの得意な分野で個性を発揮できること、協力する気持ち・自主性を発揮できること、教育の目的が各領域で教えたことを総合し実践することにあることなどを明らかにした。また、北村（1984）は、総合活動としての重要性を創作オペレッタで認識し、その実践と意義について考察した。北村は、創作オペレッタの実践が保育者の資質を高め、保育者を育成できる教材である⁶と述べている。さらに、佐々木・葛谷（2016）は、養成課程におけるオペレッタ活動で、社会人基礎力獲得の可能性に着目し、オペレッタが社会人にとって必要なスキルを獲得するために役に立つ取り組みであることを示した⁷。このように、先行研究から養成課程におけるオペレッタの重要性が窺える。

次に幼稚園教育要領（及び保育所保育指針）から養成課程におけるオペレッタの重要性を探る。現行の幼稚園教育要領には、5領域による「ねらい及び内容」が示されている。オペレッタはその領域の中でも、オペレッタの特徴である音楽的要素、美術的要素、舞踊的要素の観点から、「表現」との関わりが深い。「表現」の「2 内容」の中から特に関連する項目（4）（6）（8）を引用する。「（4）感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。（6）音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。（8）自分のイメー

ジを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。⁸」

しかし、オペレッタは音楽的要素、美術的要素、舞踊的要素だけでなく、文学的詩的要素、演劇的要素なども含むことから、領域の「表現」（音楽・造形・身体）だけでなく、養成課程によっては領域の「言葉」と「表現」を合体させた科目も存在する⁹。平成28年度に文部科学省が保育教諭養成課程研究会へ調査委託した「幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」では、このような複合的な科目を推進している（文部科学省，2017）¹⁰。また、オペレッタ活動を進める過程においては、一人ではなくグループまたはクラスでの活動となる。そのため、「人間関係」の観点を到達目標に掲げる科目も存在し¹¹、領域の「人間関係」とつながりをもったオペレッタもありうる。このように、オペレッタは5領域全てを網羅するとは言い難いが、複数の領域にまたがり、総合的な指導の要となる可能性は否めない。北村（1986）は、オペレッタを幼児教育の現場に取り入れる理由として、その総合活動としての要素に価値を見出しているからだと述べている¹²。

前章で述べたように、平成29年改訂の幼稚園教育要領及び保育所保育指針では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿が示された。卒園までに育まれてほしい子どもの姿を、5領域のねらい及び内容に基づき、10の具体的な視点から捉えて方向性を明確化したものである。（項目については前章参照）平成27年12月の中央教育審議会答申では、幼稚園教諭の養成課程において、「幼稚園教育におけるねらい及び内容を『健康』、『人間関係』、『環境』、『言葉』、『表現』の領域別に幼稚園教育要領に示しつつ、幼稚園における生活の全体を通じて、総合的に指導するという幼稚園教育の特性を踏まえて検討を深める必要がある。」と述べ、総合的な指導を強化する方向を示している¹³。

岡崎（2018）は、「オペレッタを経験することで子どもの成長発達に役立つ要素」として、前述した10の姿の項目すべてに触れることができると述べている¹⁴。たしかに、文科省が示した授業モデルの中には、「幼児期の表現の学びには、小学校の音楽科・図画工作科だけでなく、国語・算数・生活・体育など他教科にわたる教育内容につながりがあることを、具体例を示して説明する。」や、「『領域』と『豊かな感性と表現』の関連だけでなく、幼児の表現活動の中での『協同性』や『言葉による伝え合い』の育ち、『思考力の芽生え』等、他領域との関連も含めて説明する」等が示されていた¹⁵。

このように、先行研究の考察と幼稚園教育要領・保育所保育指針の方向性から、養成課程におけるオペレッタは重要であると考えられる。オペレッタ活動は、総合的な指

導を実現するとともに、多方面から子どもの成長発達を促し、さまざまな力を育む一助となる。また、幼稚園教諭や保育士を目指す学生がオペレッタ活動を体験的に行うことで、指導及び運営ができる力を育成することにつながるだけでなく、今後の教育・保育現場に求められる豊かな人間性と社会性、そして質の高い保育者として活躍できる人材を育成することにもつながるといえよう。

3. アニメ制作によるオペレッタ

「音楽Ⅱ声楽」「音楽Ⅱ歌唱」はオペレッタ活動を中心とした授業である。例年、学期末に実演発表を行っていた。しかし令和2年度より、新型コロナウイルス感染症対策のため、アニメーションを用いた作品発表を実施している。芝居やダンス、大道具などの演出は全てアニメーションに替え、歌唱についても生演奏ではなく事前収録によるものを使用した。この収録の際も、感染症対策に留意して録音作業を行わせた。

また「音楽Ⅱ声楽」「音楽Ⅱ歌唱」では歌唱技能の定着のため、授業前半に下記課題を用いた歌唱指導を実施した。

- ・輪唱、重唱課題曲
- ・コールユーブンゲン No.72,73
- ・コンコーネ No.1～No.16
- ・日本童謡唱歌全集（足羽章編／ドレミ楽譜出版社）
より抜粋した童謡
- ・唱歌「花」「花の街」「浜辺の歌」「荒城の月」
（「音楽Ⅱ声楽」でのみ実施）

輪唱や重唱では、他者の声を聴いてハーモニーを感じながら歌ったり、他の音につられずに正しいハーモニーを保ちながら歌唱したりする練習を行った。中でも、コンコーネと唱歌に関しては個人指導を実施した。特に唱歌については1人1曲選択させ、技能の定着を図るために、感染症対策を講じた上で発表会を行った。授業内では正しい音高、音程、リズム、歌詞の明瞭な発音等、オペレッタ活動にも不可欠である歌唱技術の指導を行うなどして、学生の基礎的な歌唱技能の習得を促した。

また授業後半ではオペレッタ活動に重点を置いた。2～5名程度のグループを組み、各自で役割分担を行いながら作業を進めた。4月から演目決め、資料収集、台本作成を開始し、順次アニメーション制作や歌唱練習、音源作成に取り組んだ。6月後半からは完成した作品を授業中に発表し、教員の指導の下、内容の充実を図り修正を重ねた。最終的には300人収容規模の教室にて、完成した作品の上映が行われた。

今回のオペレッタ活動では「白雪姫」「アリとキリギリス」「オズの魔法使い」「3匹の子ぶた」「あかずきん」

など、幼児にもなじみ深い童話が多く取り上げられた。台本に関して、「オペレッタ活動に関するアンケート（98名回答）」によると「書籍や絵本を元に編集を行った」という学生が69.4%、「紙芝居から全てを引用した」という学生が26.5%、「全てオリジナルで作成した」という学生が9.2%、「絵本から全てを引用した」という学生が6.1%となった（複数回答によるため、合計は100%とはならない。回答の一部を抜粋し記載）。いずれの演目も10分程度にまとめるよう規定していたため、物語の内容を編集・要約するなどして、各グループで構成を工夫したことがわかる。

アニメーション制作においては、グループごとに工夫を凝らした制作手法が見られた。アニメーションの再生は、ほとんどのグループが大学配布のノートパソコン内蔵のパワーポイントやフォトのアプリケーションを使用し、5～10枚程度のアニメーション付きのスライドを順番に表示していく形をとった。スライドのベースとなるものについては、「紙芝居をスキャンして使用した」という学生が54.1%を占めた。次いで「著作権フリーの画像を使用した」という学生が24.5%、「自分で描写した」という学生が16.3%となった。著作権保護の観点から、原則、作品のイラストをそのまま使用する形で紙芝居等のスキャンを使用させている。「自分で描写した」と答えた学生の半数以上がパソコン内蔵のペイントやフォトのアプリケーション、スマートフォンのイラスト作成アプリケーションを使用した（図1）。中には紙にイラストを描写して、それを撮影した画像を素材として使用したグループや（図2）、切り絵を撮影して用いたグループもあり、手書きの温かさを残した作品も仕上がった。アニメーションについては、パワーポイントやフォト、スマートフォンの動画編集アプリケーションを用いて制作した。どのように動かせば観る側に伝わるアニメー

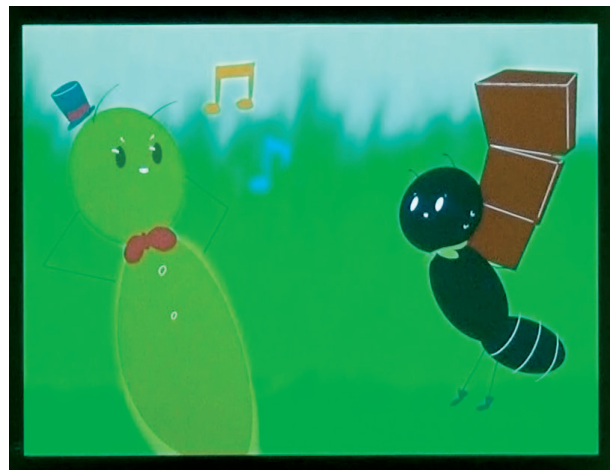


図1 イラスト作成アプリケーションによる作画
「アリとキリギリス」より



図2 紙に描いたイラストを使用した作画
「白雪姫」より

ションになるのか配慮しながら、セリフや心情に合わせて登場人物を動かしたり、物語の展開に合わせて物体や背景を動かしたりするなど、技術的な工夫を施した。ここでは、実演時の大道具や小道具では実現できない演出も、アニメーションで表現することが可能となったため、演出の幅は広がったといえる。また演出に関して言えば、スライドの上映に加えて、多色展開のLEDライトとミラーボールも使用できるようにした。手で操作が必要のため、スライドに合わせて照明プランも各自計画した。

また、音源の作成についても各グループで様々な手法を用いた。作成に入る前に、今回の歌唱練習と収録においては、新型コロナウイルス感染症対策のため密を避けた環境を選ぶこと、十分な対策が取られていない環境では一斉に歌唱しないことを周知徹底した。作成方法は、「全て生演奏を録音した」という回答が73.5%、「音楽ソフトと生演奏の録音を併用した」という回答が12.2%、「著作権フリーの音源と生演奏の録音を併用した」という回答が24.5%に及んだ（複数回答によるため、合計は100%とはならない。回答の一部を抜粋し記載）。中には、「ガレージバンド」というスマートフォンのアプリケーションを用い、ピアノ伴奏を全曲打ち込みで作成したグループもあった。さらにそのグループは、歌唱パート1、歌唱パート2、歌唱パート3のように順番にパートを重ね撮りしていくことで一斉の歌唱を避けながらも複数の声部を持つ楽曲の収録を可能にした。このような取り組みは、日ごろピアノ演奏に自信が無い学生でもピアノの音源作成や音楽活動に携わることができるという点で興味深く、また感染対策の観点でも昨今の教育現場に求められるテクニックであると考えられる。

今回のオペレッタ活動では、例年のような実演は叶わなかったが、新たな手法により様々な成果も得られたようである。アンケートにて「アニメーションによるオペレッタ活動を通して、どのように感じたかあてはまるものを選択してください。」という問いを設定した。1を「そう思わない」、5を「そう思う」という形で5段階評価

の回答を求め、集計した。「人数や演出にとらわれない作品制作ができた。」という問いに対して約80%が5段階評価中4以上を回答した。登場人物の数や演出に制限がないため作品選びの自由度が高かったことや、台詞や歌唱についても分担が自由であるため出演の機会の偏りも防ぐことができたと思われる。また対面での歌唱練習や録音に制約があったため音楽的な内容の希薄化が懸念されたが、「音のバランスやハーモニーに注意しながら音楽の収録ができた。」という問いに対しても80%以上の学生が5段階評価中4以上を回答している。今回は録音作業が必須であったため、自分たちの演奏がその都度フィードバックされる形となり、ただ実演で歌唱するよりも細かく修正、改善を試みる機会が多く生じたことがこの結果につながったと考えられる。また、昨今は幼小接続の観点からICT教育の早期導入が期待されている。「ICTの活用について学ぶことができた。」という問いに対して90%以上の学生が5段階評価中4以上を回答していることから、今回のアニメーションによるオペレッタの制作は、ICTに触れる新たなきっかけとなったようである。しかし、今回の活動を通して新たな課題も生じたようだ。学生からは、「パワーポイントでフリー素材を使って作品を作ることはアニメーションで動かす分には使いやすいが、細かい描写を描く分には使いづらいと感じた。」や、「動画にした後の確認をできていなかったで、そこをするとスムーズにできたと思う。また、効果音を加えるとより良い作品ができたのではないかと思う。」や、「回線によってスライドが止まってしまった」というような意見があがった。実演できる環境が戻ってきたとしても、今回の取り組みは表現豊かなオペレッタ作品づくりの一助となり得るため、今後の参考としていきたい。

おわりに

オペレッタは、幼児期の子どもの成長において相応しい活動であることを述べてきた。また、活動を行うにあたり、保育者の役割は重要であり、幼稚園教諭・保育士養成課程においてオペレッタを経験することの必要性を述べてきた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、オペレッタ実演ができない状況が生じた。このような状況において、実演のオペレッタに近い形で経験をしたいとの考えから行ったのが、アニメ制作によるオペレッタである。第三章で述べている通り、一定の成果が得られたと考える。さらに、作成過程を通して、実際に保育者として子どもたちとオペレッタを行う際に適用できそうな発見もあった。

新型コロナウイルス感染症の収束は、現状において見

通せない状況である。授業においてオペレッタ実演が難しい状況は、さらに数年続く可能性がある。アニメ制作によるオペレッタは、擬似体験ではあるかもしれないが、保育者を目指す学生にとって、子どもたちと実際に活動する際の学びに繋がっていると確信している。実演でのオペレッタが可能となった際、活用できる内容も多くあった。さらに充実した活動となるよう追求していきたい。

引用文献

1. 山本学 (2009)「教育現場と教員養成校における音楽劇・オペレッタの教育的意義についての考察」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学研究紀要第44号 pp.101
2. 三好優美子ほか (2018)「総合表現(創作オペレッタ)における表現科目の連携:「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学研究紀要第53号 pp.47
3. 上記引用文献1 pp.98
4. 『学校劇』玉川大学玉川学園ホームページ https://www.tamagawa.jp/introduction/enkaku/history/detail_10796.html
5. 冨田博之 (1998)『日本音楽教育史』国土社出版 pp.277
6. 北村恵子 (1984)「創作オペレッタ実践の意義:保育者の資質を高める音楽教育として」上田女子短期大学研究紀要第7号 pp.64
7. 佐々木友里・葛谷潔昭 (2016)「保育士養成におけるオペレッタ創作の効果-社会人として求められる能力の獲得の可能性について-」豊岡短期大学論集第13号別冊 pp.192
8. 文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領 平成29年告示」
9. 伊藤智里他 (2014)「総合表現(オペレッタ)における授業開発Ⅱ-領域「言葉」「表現(身体表現・造形表現・音楽)」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連-」川崎医療短期大学研究紀要第34号 pp.29
10. 文部科学省 (2017)「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」pp.8
11. 上記引用文献9 pp.30
12. 北村恵子 (1986)「幼児の創作オペレッタ実践の意義-創造的音楽表現活動としての観点から-」上田女子短期大学研究紀要第9号 pp.75
13. 上記引用文献10 pp.3
14. 岡崎裕美 (2018)「保育者養成における子どもと音楽の関わりの一考察-オペレッタの取り組みによる学習成果-」千葉敬愛短期大学研究紀要第40号 pp.48
15. 上記引用文献10 pp.33